



喜多川歌麿「潮干のつと」(部分) 寛政元年(1789) 千葉市美術館蔵

館長のつれづれコレクション案内

花魁と役者の自筆歌入り肉筆浮世絵



菱川師胤

「中村竹三郎・三浦屋小紫図」

享保元年(1716)頃 絹本着色 双幅
各70.2×32.8cm

向かって右幅に豪華な打掛の裃をとって左方を眺める女性、左幅に右方へ歩みつづ編笠を掲げる男性。女性の簪と男性の編笠の高さがほぼ等しく、双方とも互いに向かって緩やかに弧を描く立ち姿。着物の裏地の緋色がつくる逆V字が双福の構図の関連に重要な役割を担っています。女性は扇面散し模様の赤い着物の上に、縮緬地に片輪車、蕨の模様の花筏紋の打掛、男性はやはり縮緬地に桔梗、菊、葡萄など模様の小袖の上に縦縞に巴紋の羽織を纏っています。良質な顔料で生地織模様や刺繍などが細かく入念に描かれ、依頼主の思いの深さが窺えます。

浮世絵版画が幕末に海外向けの船荷の緩衝材としてヨーロッパに渡り、その表現の新しさに感銘を受けた画家たちが、後に印象派と呼ばれる画風を創り出したことはよく知られています。これほど造形的に質の高いものが、日本では船荷の詰め物にするほど廉価で日常的なものであることもまた、ヨーロッパの人々の「芸術の国日本」という認識に結びついてきました。そのため、海外では浮世絵版画の人気が高く、高価なコレクションアイテムとなって現在に至っています。

版画の評価が先行したためか、浮世絵には本作のような肉筆画もあることはあまり知られていないかもしれません。版画の場合、絵師が渡した原画は版木に貼られ、彫師がそれをもとに版木を彫るので原画は残りません。そのため、絵師の画力は、肉筆画にこそあらわれます。

本作の作者は、^{ひしかわらたね}菱川師胤。浮世絵の始祖とされる菱川師胤あるいは師重の門人と思われませんが、詳細はわかりません。この二幅が納められた箱には享保元年(1716)の箱書があり、描かれているのは中村勘三郎座の歌舞伎役

者の中村竹三郎と吉原の本店三浦屋の小紫、上部の歌はそれぞれの自筆であることがわかります。初代中村竹三郎(?-1724)は花魁や若衆を得意とした花形役者で、享保から寛延(1716-51)頃に活躍した奥村利信筆「初代中村竹三郎の傘さす若衆と道化」(東京国立博物館蔵)、「二代目市川団十郎と初代中村竹三郎」(東京国立博物館蔵)、鳥居清信(初代)筆「袖崎小太郎と中村竹三郎の双六遊びの男女」(1710年頃 ポストン美術館蔵)などに描かれています。

三浦屋小紫と言えば、鳥取藩士平井権八(1655?-1679)との熱愛が歌舞伎の演目「権八小紫物」となった二代目小紫が思い浮かびますが、中村竹三郎とは時代があわず、後世の人と思われず、小紫の幅の右下に「大和絵菱川師胤図」、上部の歌は「なかれの身もん似あわしきはないかた」、竹三郎の幅の左下に「日本絵菱川師胤図」、上部の墨書は「逢うことを まし月日の程よりも けふのくれこそ ひさしかりけれ」という「拾遺和歌集」にある上中臣能宣の歌です。能宣は平安期の歌人で、三十六歌仙のひとり。この歌には「はじめてをんなのもとにまかりて又の朝につかはしける」という詞書があります。歌を踏まえれば、小紫のもとから帰る竹三郎、それを見送る小紫の姿とも思われます。

「拾遺和歌集」の歌とともに、当代きっての花形役者と花魁の姿を觀賞したのはどのような人々だったのか、そしてどのような場でこの二幅が掛けられたのか、興味の尽きない作品です。

【館長 山梨絵美子】

開館
30周年
記念
江戸の名プロデューサー
葛屋重三郎と
浮世絵の

担当学芸員インタビュー

2025年は千葉市美術館開館30周年イヤー。5月30日からは、現在放送中の大河ドラマでもおなじみの葛屋重三郎を起点に、当館のコレクションの大きな特徴である浮世絵をご紹介します。展覧会を開催します。展覧会の具体的な内容や見どころについて、担当学芸員に聞きました。

※作品画像はすべて千葉市美術館蔵

【話し手:学芸員 染谷美穂】

—はじめに、本展はどのような展覧会か教えてください。

千葉市美術館開館30周年を記念して開催する浮世絵展です。浮世絵は千葉市美術館が生まれる契機のひとつとなったコレクションなので*、それらを中心とした展覧会を考えていました。そのタイミングで、ちょうど葛屋重三郎が大河ドラマに取り上げられ、世間的にも浮世絵が注目されつつあるということで、葛屋を軸としながら浮世絵の初期から世界への発展までをご紹介します構成を考えました。

*千葉市美術館は、故中宏氏が収集した漢斎英泉の浮世絵コレクションを、千葉市が受贈・購入したことがきっかけのひとつとなり設立されました。

—葛屋重三郎とはどのような人物なのでしょう。

葛屋は吉原に生まれました。20代前半に、吉原の近くで貸本をメインにした本屋を営み始めます。そこで『吉原細見』という、いわゆる吉原のガイドブックをつくるのですが、それが従来の『吉原細見』とはまったく違っていました。判型を大きく、厚さを薄くし、コストを抑え扱いやすかったのです。また、吉原生まれということもあり、吉原に出入りする絵師や俳人、狂歌師などの仲間が多く、そのネットワークを広げることでさまざまな作品を実現していきました。アイデアマンで、流行の先を読むことができ、いろんな人を巻き込んでより良い作品をつくっていった人でした。

—裏方の人間でありながらここまで名前が残っているのは、それだけ大きな仕事をしたからなのでしょう。

そうですね。とくに葛屋とかかわりのあった絵師として喜多川歌麿がいますが、歌麿も葛屋と組んでいた時期は表現の幅が広がり、おもしろい作品が生まれています。たとえば、それまで役者絵でしか使われていなかった大首絵*の様式を美人画に応用して描き始めるのですが【図1】、これは葛屋のプロデュースによるものです。絵師の才能を引き出せるというところが、葛屋のすごいところだったのだと思います。面倒見もよかったですよね。歌麿とは衣食住をともにしていたとされています。



【図1】喜多川歌麿《当時三美人 富本豊ひな 難波屋きた 高しまひさ》寛政5年(1793)

ろい作品が生まれています。たとえば、それまで役者絵でしか使われていなかった大首絵*の様式を美人画に応用して描き始めるのですが【図1】、これは葛屋のプロデュースによるものです。絵師の才能を引き出せるというところが、葛屋のすごいところだったのだと思います。面倒見もよかったですよね。歌麿とは衣食住をともにしていたとされています。

*人物の上半身をクローズアップして描いた浮世絵のこと。

—30周年記念ということで、出品作品のほとんどが当館のコレクションで構成されているのですよね。

特別出品としてお借りしているものも何点かありますが、それ以外はすべて所蔵品で、展示替えを含めて150点ほど展示します。千葉市美術館の浮世絵コレクションは、教科書のような内容なんです。有名な作品がしっかりあり、「これなくては次がない」というような作品がバランスよく集められています。



【図3】喜多川歌麿「画本虫撰」天明8年(1788)



【図4】喜多川歌麿「潮干のつと」寛政元年(1789)



【図2】北尾政演「吉原傾城新美人合自筆鏡」天明4年(1784)刊

—コレクションを活かして葛屋重三郎を語るようになったとき、どのようにして内容を考えられたのでしょうか。

まず、「そもそも葛屋が出てきた背景にはどういった文脈があったのか」ということがわかるとおもしろいと思いました。そこで、葛屋が生まれたころになにが起きていたか、葛屋が活躍した同時代になにが流行っていたかなどをわかりやすく紹介するため、さまざまな美人画や役者絵を時代ごとにお見せすることにしました。

—具体的に今回の出品作のなかで、葛屋がかかわった作品にはどのようなものがありますか。

たとえば『吉原傾城新美人合自筆鏡』【図2】は、もともと二枚続きの錦絵として売り出された作品群を本にしたものなのですが、遊女が自ら狂歌や詩の字を書いているんですね。これは吉原にネットワークのある葛屋だからこそできたことだと思います。また、『吾妻曲狂歌文庫』は、いろいろな狂歌師の肖像と狂歌を載せた本で、読んでいると葛屋がどういった人々とかかわりを持っていたのかがわかります。酒井抱一や市川団十郎など、顔の広い人だなと思いますね。

—版本はさまざまな種類の題材が描かれていますね。

そうですね。多くは狂歌集なのですが、狂歌よりも絵がメインになっているものもあり、斬新です。チラシにもつかわれている『画本虫撰』【図3】は彫りが非常に細かく美しいですし、『潮干のつと』【図4】は貝殻に雲母が乗っていて手元できらきらと光るのです。

—そのほかに見どころとなる作品はありますか。

特別出品ですが、歌麿による肉筆浮世絵《祭りのあと》は、近年発見され本展初公開となる作品です。そもそも歌麿の肉筆浮世絵が珍しいのですが、天明期のものはさらに珍しいのです。それから、「馬尽 轡町」【図5】には『吉原細見』が描かれています。『吉原細見』の実物の展示はないのですが、作品を通してご覧いただけます。

—葛屋重三郎をテーマにした展覧会は、他の美術館でも開催されるようですね。千葉市美術館ならではのポイントがあれば教えてください。

葛屋重三郎が活躍した黄金期だけでなく、初期から海外への展開まで、浮世絵の発展を年代ごとにご紹介するところでしょうか。とくに初期浮世絵は数が少ないのですが、当館には優れたコレクションがあります。それから、貴重な作品で言うと、鈴木春信も展示替えを含んで8点展示する予定です。

—最後に、来館者のみなさんへメッセージをお願いします。

浮世絵の歴史のなかで、葛屋重三郎という人がどういった文脈で現れ、どう活躍したのか。そして、葛屋の発想が浮世絵の発展にどう影響を与えたのかということ、当館のコレクションを通してご覧いただけたら嬉しいです。



【図5】葛飾北斎「馬尽 轡町」文政5年(1822)

開館30周年記念
江戸の名プロデューサー 葛屋重三郎と
浮世絵のキセキ
会期 2025年5月30日[金] - 7月21日[月・祝]
会場 8階企画展示室
休室日 月曜日(7月21日は開室)
詳細はホームページよりご覧ください



開館30周年記念

日本美術とあゆむ

—若冲・蕭白から新版画まで

30th Anniversary of the Museum's Opening

Walking Alongside Japanese Art: From Jakuchū and Shōhaku to Shin-hanga

開館30周年を迎える今年、「蔦屋重三郎と浮世絵のキセキ」展と同時開催で、当館のコレクションハイライトをご覧いただける展覧会をお届けします。本展では、当館のこれまでの取り組みを辿りながら、江戸時代から近代にかけての絵画や版画を中心に展示予定。そのなかでも特に注目の数点を、担当学芸員のコメントとともにご紹介します！

[コメント:学芸員 松岡まり江]



伊藤若冲《鸚鵡図》

絹本着色1幅、宝暦(1751~64)後期

近年、さらに注目が高まる伊藤若冲(1716~1800)。今回は、『乗興舟』など数点の若冲作品を取り上げるほか、『鸚鵡図』を展示します。本作が登場した「伊藤若冲 アナザーワールド」展(2010年)は、当館で歴代5位の入場者数を誇る展覧会でした！

《乗興舟》は久しぶりに全巻を全期間公開！ご期待ください。

渡辺崋山《佐藤一斎像画稿 第三~第七》

紙本墨画淡彩5幅、文政4年(1821)頃

三河田原藩士の渡辺崋山(1793~1841)による、儒学の師・佐藤一斎の肖像画の画稿(下絵)。描き直しの跡からは、崋山の苦心と敬意を見て取ることができます。東京国立博物館が所蔵する完成作は、重要文化財に指定されています。

2011年度にご寄贈いただき当館コレクションに加わった逸品です。



吉田博《光る海 瀬戸内海集》

木版多色摺、大正15年(1926)

大正初期に創始された新版画の大家 吉田博(1876~1950)による、連作『瀬戸内海集』(全9作)の第一作。新版画人気の一翼を担った「生誕140年 吉田博展」(2016年)開催に際して、画家のご遺族より直接購入させていただいた作品のうちの1点です。



本展では吉田博のほか、川瀬巴水、伊東深水、橋口五葉らの代表作もお楽しみいただけます。

曾我蕭白《獅子虎図屏風》

紙本墨画2曲1双、宝暦(1751~64)頃

京都の画人・曾我蕭白(1730~1781)が描いた墨画の屏風。美術館開館前に購入したのち、初代館長辻惟雄先生肝いりの「江戸の奇才 曾我蕭白展」(1998年、詳細は本紙4ページ)をはじめとして展示され、蕭白らしき溢れるユーモラスな獅子と虎が愛されてきました。

奇矯な画風が強調されがちな蕭白ですが、水墨画家としての腕も一流。図柄の楽しさとともに、自由自在に踊る墨線の美しさも堪能いただきたい作品です。



このほかにも、当館の展覧会を彩ってきた名品を多数展示します。当館が誇るコレクションの数々を、ぜひこの機会にご覧ください！

「江戸の名プロデューサー 蔦屋重三郎と浮世絵のキセキ」同時開催
開館30周年記念

日本美術とあゆむ—若冲・蕭白から新版画まで

会期 2025年5月30日[金]—7月21日[月・祝]

会場 7階企画展示室

休室日 月曜日(7月21日は開室)

詳細はホームページよりご覧ください



「つくりかけラボ17 井上尚子|記憶の標本室 — Life is Smell project — KUNKUN Laboratory」レポート

匂いが記憶をよびおこす。オープンワークショップのしかけとは？

[Photo: Akinori Tanaka]

つくりかけラボを訪れる人が、いつでも自由に参加できるオープンワークショップ。今回は、「匂いと記憶のアーティスト」井上尚子さんによる「記憶の標本室」の様子をレポートします。

Section 1 ウォーミングアップ 匂いの好みを探る

鼻の準備運動をします。

- ① 小さな瓶に用意された千葉にまつわる匂い3種をかき、「すきらいー何もかんじない」のシールを選んでボードに貼ります。みんなの感じ方はどうなっているのでしょうか？
- ② 匂いのおみくじ「はなみくじ」を引きます。32種類のおみくじには匂いにまつわるお題が書いてあり、それに沿って自分の言葉を記します。



Section 2 匂いとその記憶を楽しむ



瓶に入った60種類以上の匂いを自由にかき、パネルに書かれた誰かの「記憶のストーリー」を読みながら匂いと記憶を結びつけていきます。ふたを開けると、中から音楽が広がる瓶も。これはVegetable Record(林翔太郎さん・三上僚太さんによる音楽ユニット)が匂いから着想を得て作った音楽。匂いと音、記憶が場を包み、ゆっくりと記憶が呼び起こされていくのです。

「匂いがテーマだけど、これもアートなの？」と驚かれる方も多いこのプロジェクト。ここではひとりの中にあるものを、多くの人と共有するというアートの根っこのようなものが張り巡らされています。嗅覚をフルに使って、音楽の力を感じながら記憶の根をたどるような体験を存分にお楽しみください！

Section 3 記憶をしるす



最後は、匂いにまつわる自分の「記憶のストーリー」を書きこむ時間とスペース。思い出に残る匂いを書いても、未来のストーリーを想像して書いてもOK。集まったストーリーをもとに作家がパネルをつくり、壁に掲示しています。



つくりかけラボ17 井上尚子|記憶の標本室
— Life is Smell project — KUNKUN Laboratory

会期 2025年2月12日[水]-6月1日[日]

会場 4階子どもアトリエ

休館日 3月3日[月]、4月7日[月]、21日[月]、

5月7日[水]、19日[月]

詳細はホームページよりご覧ください





千葉市美術館開館30周年記念

歴代館長インタビュー ～初代館長 辻惟雄先生～

インタビューのフルサイズは動画で公開予定!

記念すべき節目の年に、これまで千葉市美術館を率いてくださった3名の歴代館長、そして現館長にインタビューをおこないました。4号にわたって、インタビューを誌面に再編集したテキストを掲載します。第一弾は、1995年から99年に在任した初代館長の辻惟雄先生です。



辻惟雄 (つじ・のぶお)

1932年愛知県生まれ。東京大学大学院博士課程退学。東北大学文学部教授、東京大学文学部教授、国立国際日本文化研究センター教授のち、1995年から1999年まで千葉市美術館の初代館長を務めた。現・東京大学名誉教授、多摩美術大学名誉教授。著書多数。

着任当時のこと

私が千葉市美術館の館長を仰せつかったのは、65歳の時でした。それで、オープンの時にやったのが豪華な喜多川歌麿展で、特に大英博物館の名品が主になって行われたものだから、素晴らしい展覧会だったんですね。あの展覧会は、これまで行われた日本での歌麿展の指折りに数えられる規模と内容だったと思います。文化的な催し、特に展覧会なんかは、東京で行ってみればいいというような考えがあったものから、当初からそれを何とかしようという考えがありました。その第1号にふさわしい、千葉市民の目を東京から千葉に向けさせる展覧会になったと思っていますね。

印象に残っている展覧会

「江戸の鬼才 曾我蕭白展」(1998年)



蕭白展は、私が肝いりでやりました。『奇想の系譜』のメンバーの一人をやった、これは忘れ難い展覧会です。ポスターに何か文句を書こうと思って、「奇怪でかわゆく この世のものとは思えない」というのは、私が作ったものなんです。蕭白の名前をポピュラーにする上で、だいぶ貢献したと思います。

「東山魁夷展」(1998年)



いいものが出たのですよね。特に下絵の類が出たというのは画期的で。《道》は有名な作品ですが、あのために克明なスケッチが何十枚もあるというところで驚きました。そのうちかなりの部分をあの会場で展示した。《道》ができるまでにはこれだけの下積みがあるんだ、ということをお見せして、この作品だけをとり、この展覧会をやった意味があると思っていますね。

千葉市美術館のコレクションについて

円山応挙《富士三保図屏風》安永8年(1779)



「これが応挙かいな」というような珍しい没骨風の作品ですが、こういう例外的なものも何でもこなすという職人肌の応挙だからこそやって見せたのであって、応挙も苦勞してつくっておられる作品だと思いますね。

曾我蕭白《虎溪三笑図》安永期(1772～81)頃

私がいたとき(1996年度)に購入したものです。力のこもった素晴らしい作品です。



もし1点千葉市美術館のコレクションを私蔵できたら？ 私の好みから言いますと、やはり《虎溪三笑図》かな。堂々とした作品で、あれが欲しいですね。

橋口五葉《髪梳ける女》大正9年(1920)



それから、橋口五葉とか伊東深水とか、そういう近代版画の傑作ですね。恩地孝一郎の『氷島』の著者・萩原朔太郎像なども素晴らしいです。

あとは現代の人を。李禹煥の《点より》はいいですね。今じゃ手に入らない李禹煥の傑作です。白髪一雄《天英星小李廣》もなかなか。現代美術の学芸員はいいものを残されましたね。やっぱり現代美術のコレクションもしっかりしていると私は思います。

これからの千葉市美術館へのメッセージ

中には素晴らしいコレクションで、まだ展示の機会を見ないというものが幾つもあります。そういうものも展示できるように機会を設け、豊富なコレクションを十分に活用するというの、一番のこれからの目標じゃないでしょうか。特別展というのは、他の美術館から借りてこられるけれども、むしろ主体は千葉市美術館の蔵品にあると私は思います。コレクションの特色を生かした展覧会を、これからも本当にお願いたしたいと思っています。

[取材日: 2025年3月2日]

美術館の仕事を紹介します!

その
19

海外への作品貸出～メルボルン編～

作品の借用や貸出は、美術館で展覧会をおこなう際、多くの場合に発生する業務です。よりよい内容を実現するため、必要な作品をお借りしたり、逆にリクエストがあれば作品をお貸したり、多くの協力のもとで展覧会は成り立っています。そして、これは国内に限った話ではありません。海外の美術館とも、同様に作品の貸し借りをおこなうことがあります。

2024年秋から2025年春にかけて、オーストラリア・メルボルンにあるビクトリア国立美術館(National Gallery of Victoria、通称NGV)で「草間彌生展」が開催されました。千葉市美術館は、この展覧会に4点の所蔵品(《無限の網目》(1970年)、《Marilyn Monroe》(1970年)、《Matahari》(1970年)、《銀河》(1991年))をお貸ししました。そして、貸出にあたって展示・撤収に立ち会う「クーリエ」として、私がメルボルンに同行しました。

作業日の前日、下見のためにNGVに立ち寄ってみると、エントランスには大型のインスタレーション作品が2点展示され、会場はすでに草間さん一色となっていました。

クーリエの仕事は、作品の安全を守ることにあります。作業日は、作品を倉庫から搬出するところからスタート。大きなクレートに入れられた作品を展示室に移動させ、1点ずつ開梱します。開梱したら、千葉市美術館で梱包した際の調書や記録写真と照らし合わせ、作品に異常がないか丁寧にチェック。NGVには、保存・修復を専門としたスタッフであるコンサバターがおり、彼らと2人体制で作品の状態を確認していきました。

コンディションチェックを終えたら、ついに展示作業です。NGVの学芸員が定めた位置に、現地の作業員が作品を展示していきます。その際、安全に作品が展示されているか、地震や盗難の被害の心配がないか(オーストラリアでは地震はないようですが)、展示手順や展示器具などを確認しながら、作業に立ち会います。NGVのスタッフは、みなさん親切かつ丁寧に、どの作業もスムーズに進めてくださりました。



展覧会は大盛況! 会期末は24時まで開館という驚きの施策もおこなわれていました。(National Gallery of Victoria)

作品が無事展示されたことを見届け、クーリエの業務は終了。NGVでの「草間彌生展」は、なんと57万人もの入場者を数えたそうです。たくさんの方々千葉市美術館のコレクションを楽しんでいただけたことを、とても嬉しく思っています。

8月2日～10月19日に開催する「開館30周年記念 千葉市美術館と現代美術」でも、草間彌生氏の作品を出品予定です。ぜひご覧ください!

詳細はホームページよりご覧ください



NGVはメルボルンの中心を流れるヤラ川の近くにありま。



NGVの入口。「草間彌生展」の大きなバナーが掲出されています。(National Gallery of Victoria)